

## 統合失調症者の日常生活におけるニーズの検討 中間施設入所者と在宅生活者との比較から

石井 奈智子\*      北 畠 五 月\*\*      新 山 喜 嗣\*  
石井 良 和\*

### 要 旨

デイケア施設に通所している統合失調症者の日常生活上のニーズを調査し、中間施設入所者と在宅生活者による違いを中心に検討した。今回の調査結果は、統合失調症者の多様なニーズのうちの一部であるかもしれないが、「家族に急用ができたり、家族が体調を崩したりした時に短期間宿泊できる場」「スポーツやゲームなどの娯楽を楽しむ場」の質問項目で施設群と在宅群で、主観的なニーズに違いが示された。また、特にカテゴリー「精神的安定」と「日常生活活動」、「精神的安定」と「健康・治療」の間で、施設群に有意な相関関係が認められたが、在宅群では相関関係が認められず、その相関係数に開きがあった。住環境の違いによるニーズの違いがある可能性が示された。

これらの結果から、作業療法士として統合失調症者の社会復帰に参画していくにあたり、それぞれの環境の違いを考慮し、地域生活の支援の在り方を考え実践していくことが必要と考えられた。

### はじめに

近年、社会復帰や社会生活への支援において、精神障害者に対しては長期入院の傾向を是正し、可能な限り社会に復帰するための手段を講じるべきであるとするものとの共通の理解がなされてきている。精神障害のある人々をケアする場所は病院から地域社会へと変わってきていることは、国際的潮流でもある<sup>1)</sup>。

鈴木ら<sup>2)</sup>は、退院後の生活上の困難が現実のものとなり、また抱えるニーズが具体的に多様化するため、開始時の基本的な動機づけや抱える様々な問題の把握が重要であると報告している。外来通院中の統合失調症者を対象としたデイケアは通院中の患者に対する精神医療の中において、そのリハビリテーションの中核的な意味を占めるものとして重要視されてきている。また、近年精神科デイケア施設に勤務する作業療法士が増えており、地域生活を支えるために他職種と専門的な視点を持ちながら精神障害者に適切な支援をして

いくことが必要である。そのためには、社会復帰に向けて訓練中の対象者自身の生活に関するニーズを把握しておくことが重要であると考えられた。しかし、デイケアに通所中の中間施設入所者と在宅生活者ではこれらのニーズが異なっている可能性があり、もし仮に異なっているとすれば、両者に対する支援の方法も場合によっては差異を持たせるべきであることが予想される。

築瀬ら<sup>3)</sup>は統合失調症患者の生活上のニーズと生きがい感について、性による違いを中心とした報告をした。男女間の比較では、「仕事のことについて相談できる人」「一般の職場で正規の職員・従業員として就労できる職場」「家族が病気についての知識や技術を得ることのできる場」「訓練をかねて仲間と一緒に作業をし、いくらかの手当てがもらえる場」「家族に急用ができたり家族が体調を壊したとき短期間宿泊できる場」において男性のほうが女性よりも有意に必要としたり、必要とする傾向にあった。男性は女性に比べ

\* 秋田大学大学院医学系研究科作業療法学講座

\*\* 同善病院

Key Words: 統合失調症

地域生活

ニーズ

就労にこだわり、自分の病気についての家族の理解を求め、さらに、日常生活を親に依存している状況を示すものである。男性の就業へのこだわりは、一般的な社会での性役割を反映したものであり、また病気の理解を家族に求めることは、精神障害者の就業が困難な状況を考慮すると、就業できずにいる原因を自分自身の怠惰によるものではなく、病気や服薬によるものと周囲に理解してほしいと考えているものであると考察した。

安西<sup>4)</sup>は、精神障害者については、対象者に安心感や安全保障感を与えることができる信頼関係に基づくケアマネジメントが個々人のニーズに対応して提供されることを前提として統合失調症患者に必要な社会サービスは 住居プログラム、危機介入プログラム、日中の活動援助と述べた。

仲屋ら<sup>5)</sup>は、地域社会における支援として様々な社会資源の整備がおこなわれている現状をふまえて、デイケア利用者における社会資源ニーズの現状を調査し、性別や年齢で社会資源の利用が変化し、生活満足度に関連したと報告した。

芝ら<sup>6)</sup>は地域生活をおくる統合失調症者の生活支援に関するニーズ調査を実施し、対象者の半数で身の回りにかかわる生活基盤に密接した項目で支援必要と答えたことを報告した。支援不必要と答えた残りの半数の対象者では他者に依存することなく自立した生活を送っているか、家族との同居している者も多かったため、同居者による生活支援を受けていることが考えられ、地域生活を送る統合失調症者に対して、各個人の顕在、潜在化したニーズの把握が重要だと述べた。

精神障害者地域移行支援特別対策事業では、福祉ホームや介護寮入所者のうち、支援体制を整備すれば地域生活への移行が可能な人に対して地域サービスを利用する機会を提供し、退院および退院後の自立生活のための支援を行うことにより社会的自立を促進することが強化され実施されている。精神障害者を対象とした中間施設は、長期在院者が社会生活の第一歩として一人暮らしをするために生活技能の訓練をする場であり、治療側スタッフの援助を受けながら一定の期間の入所を経験する。その後、これら患者は、専門スタッフが不在の一般アパートや、家族との生活といった、いわゆる地域での生活へと移行していくことになる。

病院を退院したあと、地域生活をおくる精神障害者のニーズを把握することは、地域生活を支えるうえで重要である。これまで精神障害者の生活上のニーズやニーズに影響する要因の報告がされてきたが、中間施設入所者と在宅生活者という視点で日常生活のニーズの違いに着目した報告は見あたらない。本研究ではデ

イケア施設に通所している統合失調症者の生活上の主観的なニーズを調査し、中間施設入所者と在宅生活者による違いを中心に検討した。

## 方法

### 1. 対象

A県内にある精神科病院デイケア2カ所に外来通所中の統合失調症者63名(男性45名、女性18名)を対象とした。平均年齢は $50.7 \pm 10.8$ 歳(男性 $52.2 \pm 10.1$ 歳、女性 $52.1$ 歳 $\pm 12.7$ 歳)であった。対象者には研究の内容と参加の可否によって不利益がないことを説明し、調査の同意を得た。

対象とした患者のうち、グループホーム、社会福祉ホーム、共同住居で生活している36名を中間施設入所者群(以下施設群、平均年齢 $50.1 \pm 11.7$ 歳)、家族との同居または自宅や一般アパートで生活している27名を在宅生活者群(以下在宅群、平均年齢 $51.5 \pm 9.7$ 歳)とした。ただし、在宅生活者はかつて中間施設に入所していた経歴を持つものがほとんどであった。

### 2. 調査内容(表1)

調査票は築瀬ら<sup>3)</sup>の報告で用いられたものを一部改変して使用した。調査内容の主題は「生活上必要としていること」であった。

質問項目は、今回調査に協力してもらったデイケアに通うメンバーが、そのレベルに達していないという理由で、「一般の職場で正規の職員・従業員として就労できる職場」「一般の職場でパートなどなんらかの形で就労できる場」の2項目を削除した。また、「訓練をかねて仲間と一緒に作業をし、いくらかの手当がもらえる場」という一つの質問項目については、メンバーに質問内容をよく理解してもらうために「訓練を兼ねて作業をする場」「仲間と一緒に作業する場」「いくらかの手当てがもらえる場」として3項目にわけた。さらに、自らが休み癒されるという自立的休息の過程においては、なにより「自分」という自己感覚のなかでひとりで行われる必要がある<sup>7)</sup>ため、「自分ひとりで気楽に過ごせる場」という項目を付け加えることにした。

全質問項目は22あり、「精神的安定」「日常生活活動」「就業」「生活の場」「健康・治療」「娯楽・交流」の6つのカテゴリーに分類された。

それぞれの質問項目に対して、「必要」「やや必要」「どちらでもない」「あまり必要でない」「必要でない」の5段階で回答をもとめた。

表1 統合失調症者の地域生活上のニーズ (人数)

質 問 項 目	必 要	やや必要	どちら でもない	あ ま り 必要でない	必要でない
(精神的安定)					
生活上の悩みを相談するなど、精神的に頼りになる人	34	12	1	11	5
仲間と集い、気楽に過ごせる場	48	4	4	4	3
自分ひとりで、気楽に過ごせる場	39	5	6	11	2
(日常生活活動)					
買い物や食事作り、掃除、選択などを手伝ってくれる人	11	12	1	10	29
郵便局や役所、銀行などの手続きなどを手伝ってくれる人	23	4	3	6	27
生活に必要な知識や技術を身につける場	27	15	3	5	13
人との付き合い方を練習する場	28	10	7	9	9
(就 業)					
仕事のことについて相談できる人	34	6	2	3	18
仕事に必要な技術を教えてもらえる場	33	6	4	6	14
訓練をかねて作業をする場	31	8	3	6	15
仲間と一緒に作業をする場	45	5	4	0	9
いくらかの手当てがもらえる場	35	11	4	4	9
(生活の場)					
家族に急用ができたり家族が体調をくずしたとき短期間宿泊できる場	29	7	1	5	21
身の回りの世話を受けながら生活する場	23	5	4	6	25
自立してひとりで生活できる場	37	10	2	5	9
(健康・治療)					
健康や病気の症状、治療などについての情報を得たり相談のできる人	46	6	2	2	7
家族が病気についての知識や情報を得ることのできる場	39	4	3	4	13
病気が悪くなった時にすぐに受け入れ、治療してくれる場	52	1	2	1	7
(娯楽・交流)					
スポーツやゲームなど娯楽を楽しめる場	39	9	1	3	11
趣味や娯楽の情報が入手できる場	30	8	2	10	13
教養や趣味を身につける場	25	12	5	9	12
奉仕活動や町内会活動など地域の人との交流がもてる場	28	8	5	6	16

### 3. 調査実施手順

対象者と面接し、調査票を用いた聞き取り調査を実施し、対象者に対して「これらの生活上必要とされていることの質問項目を読んで、それぞれについてどれくらい必要としているか答えてください」と教示し、回答してもらった。

### 4. 分析方法

生活上のニーズについて、全体的な傾向を把握するために、「必要」と答えたものの多い質問項目を抽出する。

さらに施設群と在宅群で、住居別、男女間、職歴の有無についてそれぞれ比較検討した。職歴の有無はカルテを参照するとともに、今回の調査時に本人に直接問診したものである。

回答は「必要」から「必要でない」の順に5点、4点、3点、2点、1点と点数化し、それらを順序尺度として Mann-Whitney のU検定を行った。

また、質問の各カテゴリーの平均点について、施設群と在宅群のそれぞれについて Spearman の順位相関係数の検定を用いてカテゴリー間の相関係数を求めた。

## 結 果

### 1. 生活上のニーズについて

生活上のニーズの量 (表1)

全体的な傾向をみると「必要」と回答したものが最も多い質問項目は、「病気が悪くなった時にすぐに受け入れ、治療してくれる場」であり、ついで「仲間と集い、気楽に過ごせる場」「健康や病気の症状、治療などについての情報を得たり相談のできる人」「仲間と一緒に作業をする場」の順であった。これら上位の質問項目は「健康・治療」「精神的安定」「就業」のカテゴリーに含まれるものであった。

## 施設群と在宅群との比較 (表2)

「家族に急用ができたとき家族が体調をくずしたときに短期間宿泊できる場」で施設群と在宅群で有意な差が認められた。また、施設群男性と在宅群男性間、施設群職歴ありと在宅群職歴あり間でも有意な差が認められた。

「スポーツやゲームなど娯楽を楽しめる場」は施設群と在宅群で有意な差が認められ、また施設群職歴ありと在宅群職歴ありでも有意な差が認められた。

「身の回りの世話を受けながら生活する場」は施設群職歴なしと在宅群職歴なしで有意な差が認められた。この項目については在宅群職歴なしが3名であったため、今回の考察に含めなかった。

## 2. 質問カテゴリー間の相関 (表3)

施設群、在宅群それぞれで、カテゴリーごとの相関

係数をもとめた。

施設群で有意な相関関係を示し、相関係数が0.4以上のものは、「精神的安定」と「日常生活活動」(rs=0.56)「就労」(rs=0.40)「健康・治療」(rs=0.57)、「日常生活活動」と「就労」(rs=0.47)「生活の場」(rs=0.42)「娯楽・交流」(rs=0.43)、「就労」と「生活の場」(rs=0.43)「健康・治療」(rs=0.58)「娯楽・交流」(rs=0.73)、「健康・治療」と「娯楽・交流」(rs=0.54)であった。

在宅群では「日常生活活動」と「生活の場」(rs=0.55)「健康・治療」(rs=0.42)「娯楽・交流」(rs=0.48)、「就労」と「娯楽・交流」(rs=0.68)、「生活の場」と「健康・治療」(rs=0.43)、「健康・治療」と「娯楽・交流」(rs=0.59)であった。

有意な相関関係を示したもので施設群、在宅群で共通していたものは、「日常生活活動」と「生活の場」「娯楽・交流」、「就労」と「娯楽・交流」、「健康・治

表2 デイケア参加中の統合失調症者における生活上のニーズ (平均値)

	施設群 (n=36)		在宅群 (n=27)		p値	男性 施設群 (n=22)		在宅群 (n=23)		p値	女性 施設群 (n=14)		在宅群 (n=4)		p値	職歴あり 施設群 (n=26)		在宅群 (n=24)		p値	職歴なし 施設群 (n=10)		在宅群 (n=3)		p値	
	施設群	在宅群	施設群	在宅群		施設群	在宅群	施設群	在宅群		施設群	在宅群	施設群	在宅群		施設群	在宅群	施設群	在宅群		施設群	在宅群				
(精神的安定)																										
頼りになる人	3.8	4.2	3.6	4.2		4.0	4.3	3.7	4.2		3.7	4.3														
仲間との場	4.4	4.5	4.5	4.5		4.1	3.5	4.4	4.7		4.2	3.3														
独りの場	4.1	4.0	4.5	4.0		3.5	3.3	4.4	4.2		3.4	2.7														
(日常生活活動)																										
APDLの手伝い	2.5	2.4	2.5	2.4		2.5	2.0	2.5	2.4		2.5	2.3														
手続きの手伝い	3.2	2.4	2.9	2.4		3.6	2.5	2.8	2.3		4.2	3.0														
生活能力獲得	3.4	3.8	3.5	3.8		3.4	3.8	3.6	3.8		3.0	3.7														
付き合いの練習	3.6	3.6	3.8	3.6		3.3	3.3	3.7	3.7		3.3	3.0														
(就 労)																										
仕事の相談	3.3	3.9	3.2	3.9		3.5	3.3	3.1	4.0		3.7	3.0														
仕事の技術	3.3	4.0	3.4	4.0		3.1	3.3	3.3	4.2		3.3	3.0														
訓練兼作業	3.5	3.6	4.0	3.6		2.8	3.3	3.6	3.6		3.4	3.0														
仲間と作業	4.2	4.3	4.3	4.3		4.0	4.3	4.2	4.3		4.2	4.3														
手 当 て	3.9	3.9	4.1	3.9		3.7	3.3	4.2	4.0		3.4	3.0														
(生活の場)																										
短期間宿泊	2.8	4.0	**	2.8	4.0	**	2.8	3.0	2.7	4.0	**	3.1	3.7													
世話を受けて生活	3.1	2.7		3.0	2.7		3.3	1.0	2.8	2.9		3.8	1.0	*												
自立して生活	3.6	4.3		4.1	4.3		3.2	4.8	3.9	4.2		3.3	5.0													
(健康・治療)																										
病気の相談	4.2	4.4		4.5	4.4		3.9	3.5	4.5	4.4		3.6	4.3													
家族の知識	3.8	3.8		4.2	3.8		3.2	3.5	3.9	3.8		3.6	4.3													
治療の場	4.3	4.7		4.4	4.7		4.1	4.0	4.5	4.6		3.7	5.0													
(娯楽・交流)																										
娯楽の場	3.7	4.4	*	3.8	4.4		3.5	4.8	3.5	4.3	**	4.1	5.0													
娯楽・趣味の情報	3.4	3.7		3.7	3.7		2.8	3.3	3.5	3.8		3.0	3.0													
教養・趣味	3.3	3.7		3.5	3.7		2.9	3.5	3.2	3.8		3.4	3.3													
地域との交流	3.1	3.8		3.5	3.8		2.5	3.3	3.1	3.9		3.1	3.0													

施設群と在宅群での比較

Mann-Whitney のU検定

\*\*p&lt;0.01

\*p&lt;0.05

表3 質問カテゴリー間の相関係数 rs

		精神的安定	日常生活活動	就 労	生活の場	健康・治療	娯楽・交流
精神的安定	施設群		0.56 **	0.40 *	0.31	0.57 **	0.38 *
	在宅群		0.16	0.15	0.16	0.11	0.27
日常生活活動	施設群			0.47 **	0.42 *	0.18	0.43 **
	在宅群			0.37	0.55 **	0.42 *	0.48 *
就 労	施設群				0.40 *	0.58 **	0.73 **
	在宅群				0.15	0.38	0.68 **
生活の場	施設群					0.37 *	0.37 *
	在宅群					0.43 *	0.38
健康・治療	施設群						0.54 **
	在宅群						0.59 **
娯楽・交流	施設群						
	在宅群						

\*\*p&lt;0.01 \*\*p&lt;0.05

療」と「娯楽・交流」であった。

一方、施設群と在宅群で相関係数にひらきがあったものは、「精神的安定」と「日常生活活動」（施設群 rs=0.56, 在宅群 rs=0.16）、「精神的安定」と「健康・治療」（施設群 rs=0.57, 在宅群 rs=0.11）であった。

## 考 察

生活上のニーズについて、全体では、「必要」と回答したものの多かった項目は「健康・治療」のカテゴリーに含まれる「病気が悪くなった時にすぐに受け入れ、治療してくれる場」「健康や病気の症状、治療などについての情報を得たり相談のできる人」、「精神的安定」のカテゴリーに含まれる「仲間と集い、気楽に過ごせる場」、「就労」のカテゴリーに含まれる「仲間と一緒に作業をする場」などであった。

この結果は、築瀬ら<sup>3)</sup>が示したように、病状が安定すること、精神的に安定し他者と気楽に交流が持てること、仕事や趣味、娯楽に打ち込めることなどに対して統合失調症者が高いニーズを持っていることを支持していると考えられた。

「家族に急用ができたり、家族が体調をくずした時に短期間宿泊できる場」に関する項目では、在宅群で施設群より有意に必要としていた。実際には、家族と同居していた調査対象者は2名であった。それにも関わらず、調査中に「必要」とする人が多かったため、家族と同居していないことを調査中、対象者に確認したものであるが、家族と住むことを想定して「必要」と答えた可能性がある。この結果は、施設群で長期にわたる入院生活から単身者としての意識が今となっても強いものと思われた。今回の調査対象者に確認できな

かったが、在宅群では家族から経済的な支援を受けたり、盆正月といった伝統的な行事に限っては家族とともに過ごすなど、家族との何らかの接触や交流をもつ機会がある可能性があり、家族の一員であるという意識につながっていることが考えられた。この項目では、施設群男性より在宅群男性で、また施設群職歴ありより在宅群職歴ありで有意に必要としている結果でもあった。住環境によって男性で違いがみられることは、一般的な社会での性役割を反映したものかもしれない。また職歴ありで見られた違いは、在宅群では家族との何らかの接触の機会が多く、一緒に住んではいないが、物理的、精神的援助を受けているかもしれないことが影響したと考えられた。大場ら<sup>8)</sup>は、ニーズの現状（生活のうえでの困りごと）への回答から有効因子を抽出後、生活全般因子を選出し、親との同居、別居と比較すると差があり、同居の人より困っていない生活全般因子があることと報告しており、職歴に関する要因についても同居、別居で影響があるのかもしれない。

「スポーツやゲームなどの娯楽を楽しめる場」でも、在宅群で施設群より有意に必要としていた。在宅で生活を営む統合失調症者では、普段交流をもつ機会や場所が限られるため、普段他の仲間と出会う機会が多いと考えられる施設群より必要性が高いと答えたと考えられた。また、今回の調査はデイケアに通所中の統合失調症者である。そのため、対象者のデイケアに対する期待が現れた結果ではないかと考えられた。坂本<sup>9)</sup>は、デイケアが従来の入院治療で実施してきた症状改善や休息などの治療的役割、いわゆるデイホスピタル的機能を求められていることを意味すると述べ、デイケアへの期待として、対人交流やデイケア活動自体を楽しみたいという意見が多かったと報告している。精

神障害者は生活療法などのリハビリテーションで社会復帰に備えていたとはいえ、入院で社会生活から離れていると社会の生活へすぐに戻るのが難しく、そのため中間施設に入所し、本格的な社会復帰をめざすことになる。デイケアの機能として、同じ病気をした仲間に出会う場であり、それは将来を照らす明かりともなるモデルとの出会いの場になることがあげられる。そして、本人の望む生活実現のために必要となる自己管理能力や対処能力獲得の場であり、発病することで失った楽しいと感じる体験ができる場でもあるといえる。

精神障害者の就職の現状から考えると病状が安定していても就職は難しく<sup>12)</sup>、デイケア利用が続くとデイケアが居心地の良い空間になると考えられる。環境の変化に弱いといわれている統合失調症患者は、できるだけストレスのかからない場所を居場所として希望していることも考えられる。坂本<sup>9)</sup>はデイケアに参加して良かったこととして、多くの者が仲間との出会いなど対人交流に関する項目や楽しめることを挙げている者も多かったと述べている。これらの理由から在宅群でスポーツやゲームなど娯楽を楽しむ場に関して在宅群で必要性が高い結果になったと考えられた。

調査の結果から、施設群と在宅群で、生活上必要としている項目で相関関係を認めたものに違いがあった。

施設群では特にカテゴリー「就労」がすべてのカテゴリーと有意な相関関係が認められた。「就労」に関する必要性が高いと他のカテゴリーの必要性も高くなるといえる。小山内ら<sup>10)</sup>は仕事についての不安は退院後の生活で必ず必要とされる項目であると述べ、山根ら<sup>11)</sup>は精神に障害があるひとの「はたらく」ことに対する思いは、経済的理由、社会復帰感、生活リズムの安定、家族の希望の取り入れと様々であると報告している。腰原ら<sup>12)</sup>は基本的な作業能力に差がないのに一般就労に結び付かない原因として、厚生労働省一般職業適性検査の結果に出てこない対人関係能力、生活リズムの乱れ、就職に関する自身のなさ不安、本人の意思のなさを挙げている。

統合失調症の患者の就労経験者では離職の回数が多いことも指摘されている<sup>2)</sup>。「就労」をし、「就労」を継続していくために様々な技能を使いこなすことが統合失調症者にとっても必要と考えられた。

在宅群では「就労」のカテゴリーと有意な相関関係が認められたカテゴリーは「娯楽・交流」だけであった。今回の調査に回答した対象者は先に述べたように、中間施設に入所した経験をもっていた。中間施設から一般アパートなどの在宅へと移行していくなかで、対象者が地域生活をおくるうえでの不安や問題が解消されていくか、問題を回避する行為をしているのかわ

れない。

施設群と在宅群で相関係数に開きがあったカテゴリーは「精神的安定」と「日常生活活動」、「精神的安定」と「健康・治療」であった。施設群で、精神的な安定が必要な人ほど、日常生活活動をうまく行うのに援助の必要があり、精神的な安定が必要な人ほど、健康・治療に関することへの援助が必要になるといえる。在宅群ではこの傾向はない。森利ら<sup>13)</sup>は援護寮利用者は共同生活のため、就寝起床時間が決められており、規則的な生活を送っていると報告している。今回分類した施設群も、森利らの報告と類似していると考えられる。このことから考えると、在宅群のほうがより自立した生活を送っていることが予想される。このことは、在宅群で就労可能な程度の社会適応能力に近い活動を保持していることが考えられた。また、中間施設を経験してから一般の住居へ移行していく際、病状の安定だけではなく、デイケアでの社会復帰プログラムがうまく機能し、地域生活を送る上での技能を向上させているからかもしれない。また、時間の経過とともに、さまざまな事柄に対処できるよう多職種で精神障害者の地域支援に取り組んでいる成果とも考えられた。

一方、有意な相関関係を示したもので施設群、在宅群で共通していたものは、「日常生活活動」と「生活の場」、「娯楽・交流」と「日常生活活動」「就労」「健康・治療」であった。統合失調症は、生活のしづらさといわれる日常生活能力の障害や対人関係能力の障害といった生活障害をもっているため共通した相関関係を認めたものと考えられた。

「わが国の入院中心の精神障害者医療とリハビリテーションを地域中心に移行させていくために、精神障害者の地域生活支援施策をさらに充実させることと同時に「障害を持ちつつ地域社会で生活する」ことを可能にするために地域リハビリテーションの発展が求められている<sup>4)</sup>。今回は特に中間施設と在宅という住環境の違いについて検討したが、それぞれの環境の違いを考慮し、地域生活の支援の在り方を考え実践していくことが必要と考えられた。

## 結 論

デイケアに通所する統合失調症者を対象として、中間施設入所者群と在宅生活者群で、生活上の主観的なニーズについて検討した。今回の調査結果は、統合失調症者の多様なニーズのうちの一部であるかもしれないが、「家族に急用ができたり、家族が体調を崩したりした時に短期間宿泊できる場」「スポーツやゲームなどの娯楽を楽しめる場」「身のまわりの世話を受

けながら生活する場」の質問項目で施設群と在宅群で、主観的ニーズに違いが示された。また、特にカテゴリ「精神的安定」と「日常生活活動」、「精神的安定」と「健康・治療」の間で、施設群に有意な相関関係が認められたが、在宅群では相関関係が認められず、その相関係数に開きがあった。住環境の違いにより、ニーズに影響を与える可能性が考えられた。

これらの結果から、作業療法士として統合失調症者の社会復帰に参画していくにあたり、居住する環境の違いを考慮した支援の必要が考えられた。

## 謝 辞

本研究にあたり、調査にご協力いただきました対象者の皆様、病院関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) Shepherd, G, 長谷川憲一・他訳：精神科リハビリテーションの最近の発展．精リ八誌 1：56-70．2000
- 2) 鈴木光弘，磯石栄一郎・他：外来作業療法の役割と課題．岩見沢市立総合病院医誌．26：65-70．2000
- 3) 築瀬 誠，田中ゆき子・他：精神分裂病通院患者の生活上のニーズと生きがい感 性による違いを中心に．作業療法18：305-314，1999
- 4) 安西信雄：統合失調症患者にどのような社会的サービスが必要か．臨床精神医学36(1)：67-71．2007
- 5) 仲屋早織，青山 宏・他：デイケア利用者における社会資源ニーズの現状と生活の満足度との関連．北海道作業療法21：64．2004
- 6) 芝圭一郎，四本伸成・他：地域生活をおくる統合失調症の生活支援に関するニード調査の実施．作業療法27；580．2009
- 7) 小林正義，富岡詔子：開かれた自閉空間の治療的利用．作業療法19：109-110．2000
- 8) 大場義貴，大島正浩：思春期，青年期層の精神科受診者への生活支援，医療支援のあり方に関する研究～241名からのアンケート調査の結果を中心として～病院・地域精神医学49(3)：231-232．2007
- 9) 坂本明子：デイケア機能を考える 久留米大学病院デイケアの実践から．精神保健福祉36(3)：245．2005
- 10) 小山内隆生，加藤拓彦・他：入院中の精神分裂病者が抱く不安．作業療法20：186．2001
- 11) 山根 寛，腰原菊恵・他：はたらく喜び・楽しみ・権利．作業療法20：172．2001
- 12) 腰原菊恵，山根 寛・他：精神障害者授産施設通所者の現状．作業療法20：174．2001
- 13) 森利佳子，井神隆憲・他：援護寮利用患者と単身生活患者の生活調査．作業療法18：126．1999．

## The influence of the residence environment on living needs for schizophrenic outpatients

Nachiko ISHII\* Satsuki KITABATAKE\*\* Yoshitsugu NIIYAMA\*  
Yoshikazu ISHII\*

\*Department of Occupational Therapy, Akita University Graduate School of Health Sciences  
\*\*Dozen Hospital

### Abstract

The influence of the residence environment on living needs for schizophrenic outpatients

The purpose of this survey was to clarify the influence of the residence environment on the living needs of schizophrenic outpatients.

63 outpatients were interviewed by questionnaire and the following results were obtained:

The living at home group needed the following more than the transitional facilities group:

- A place which could accommodate them when their families were away from home.
- A place where they could participate in sports and recreational activities.

These findings showed a difference in living needs between those living at home and those living in transitional facilities.

It is suggested that data on living needs should be available for community lifestyle support.